手探りからの再起動

Spec Archives

5号機への規則改正でどういったものならば作れるのか、各メーカーとも手探りの状態となった。ストックもAT爆裂も使えない。リプレイはずしも封じられた。メーカーの開発陣は、全くの白紙に近い状態からゲーム性を再構築しなければならなかった。

5号機初期はコイン持ちを良くしボーナス確率を下げることで短期出玉率に抵触しにくくする台が多く、リプレイタイム（RT）機能やアシストタイム（AT）機能でコインの減りを緩和し、その間にボーナスが成立することで連チャンに似た感覚を持たせる機種も存在した。

そんな状況で、ひとつの台が空気を変えた。「アイムジャグラーEX」が20万台の大ヒットを記録して話題となった。年配層ユーザーが大部分を占めていたのが助けになり、すんなり受け入れられたのが大きかった。シンプルな告知ランプ、爆裂しないが減りにくい出玉設計。4号機の文脈とは全く異なる「遊び方」が、新たな客層を引き寄せた。同じ2007年、無限ART搭載の「戦国無双」やARTの連チャン性が魅力の「2027」も登場し、ART機という新たな潮流が静かに芽吹き始めた。



アイムジャグラーEX（北電子・2007年1月）
5号機初のジャグラーシリーズとして、爆裂もストックもない時代にシンプルな告知のみで勝負した。当時の記録によると約20万台を売り上げ、冬の時代のホールを支え続けた一台となった。GOGOランプが灯る、ただそれだけの瞬間に。

2008年——緩和という反転攻勢

Spec Archives

凍りついた市場に、転機が訪れる。

パチスロ設置台数の最盛期約200万台から2009年の約134万台へと大きく落ち込んだことを受け、2007年11月に業界団体が警察庁に対して21項目にもなる規制緩和を陳情。直接出玉に関わる部分は却下されたが、小役優先のリール制御・フリーズ演出・マルチボーナスなど9項目が「解釈基準の改正」として2008年3月に認められた。

主な規制緩和の内容はボーナスフラグの同一化・リール回転中や回転終了後のフリーズ演出・リール回転順の変化・小役優先制御で、これらはすべて演出面のみの緩和だったが効果は絶大で、後々の名機開発に大きく貢献した。

フリーズ演出という一言が、5号機のゲーム性を根底から変えた。リールが突然止まる、その一瞬に「何かが起きた」という体験を凝縮できる。出玉の数値は変わらなくても、遊技体験の「密度」は格段に上がった。そしてこの解釈基準改正が引き金となり、押し順ART機やボーナス内包AT機という新世代のゲーム性が2009年以降に花開いていく。

次ページへ続く

《コラム》21の要求と、9つの答え

2007年11月、業界団体の日工組（日本遊技機工業組合）と日電協（日本電動式遊技機工業協同組合）は、警察庁に対して21項目に及ぶ規制緩和の陳情書を提出した。

背景にあったのは、数字が示す市場の危機だ。5号機導入に伴って4号機が一掃されていった2007年以降、ユーザーのパチスロ離れが深刻になってきた。設置台数は3年で200万台から134万台へと急落し、ベニヤ板が並ぶホールの光景が常態化していた。業界団体にとってこの陳情は、もはや後がない一手だった。

しかし警察庁の答えは冷厳だった。21項目のうち直接出玉性能に関わる規制緩和陳情はことごとく拒否された。認められたのは9項目——いずれも演出面の改正にとどまるものだった。

その9項目の中身を、2008年3月3日に公示された「技術上の規格解釈基準の一部改正」として整理すると、認められた主な内容はフリーズ演出・リール回転順の変化・小役優先制御・マルチボーナスなどだった。出玉そのものは変えられない。だが「体験の設計」は変えられる——そのわずかな余白を、メーカーの開発陣は最大限に使い倒した。

第3停止後にリールをフリーズさせ、その最中にボタンを連打させたり、レバーを叩かせたりと、ゲーム性の幅が飛躍的に向上した。小役優先制御の導入は、押し順ARTが台頭するための技術的な礎にもなった。

21項目を出して9項目しか通らなかった——それは半分以下の「否」だ。だが業界はその9項目の中に未来を見出した。規制と創意工夫の綱引きは、この瞬間にも続いていた。



スペックの履歴書

～パチスロ規制進化の全記録～

SPEC ARCHIVES...Chronicles of Slot Regulation

～前回の振り返り～
ユニバーサル・山佐・北電子・サミー・大都技研・NETといった主要各社の誕生と台頭を辿り、4号機黄金期がいかに多彩なメーカー競争によって形成されたかを見た。

第6回：冬の時代

～5号機が変えた空気、静まり返ったホールの記憶～

「新台なのに、ベニヤが並んでいる」——2005年から2007年にかけてのホールで、そんな光景を目にしたプレイヤーは少なくないはずだ。

規則改正という大鉈

Spec Archives

パチスロにおける5号機とは、2004年7月1日付の遊技機規則改正以後に型式試験に合格したパチスロ機を指す。それは単なる号機の更新ではなかった。4号機で横行したリプレイはずし・大量獲得機・ストック機・高純増AT機などを実質的に禁止する、パチスロ史上最大規模の仕様刷新だった。

4号機では規則の拡大解釈により射幸性が高まったことを教訓に、短期・中期での出玉率も検定基準となったため、短時間での大量コイン獲得が困難となった。一撃5000枚、711枚ボーナス4連、サイレントストックの放出——そうした体験がすべて、法律によって封印されたのだ。

5号機として最初にホールデビューを果たしたのはビスティの「新世紀エヴァンゲリオン」で、1000円で50ゲームも回る・設定6の出玉率は108%・設定6でもボーナス合成確率は1/270という仕様だった。高設定でも大勝ちできない——4号機の世界から来たプレイヤーにとって、それは別のゲームだった。



新世紀エヴァンゲリオン（ビスティ・2005年9月）
シンジ・レイ・アスカの3筐体を同時リリースするという業界初の試みで5号機時代の幕を開けた。当時の資料によると、設定6の出玉率は約108%・ボーナス合成確率は約1/270。爆裂を封じられた新時代の「別のゲーム」は、こうして静かに産声を上げた。

「ベニヤ板」が語るもの

Spec Archives

5号機が登場したばかりの頃はまだ4号機が多く存在しており、圧倒的な瞬発力を誇る4号機に5号機が敵うはずもなく、稼働・粗利ともに見込みにくいと判断されたホールで新機種の代わりにベニヤ板が並ぶこととなった。

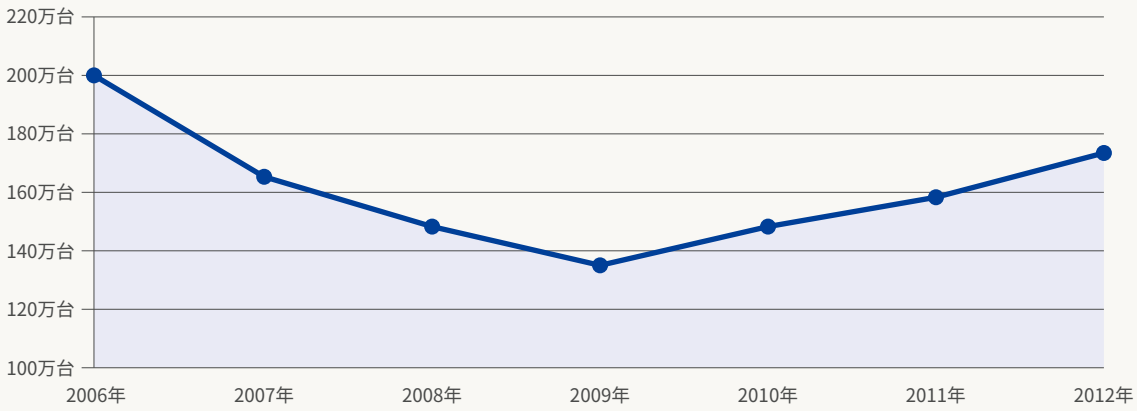
新台入替のたびにシマが「塞がれる」という光景は、5号機導入期の象徴的な風景として記憶に残っている。稼働しない台を置き続けるよりも、ベニヤで埋めた方がコスト面で合理的という判断だった。出玉感の落差が、そのままホールの空気を支配していた。

そして数字がその現実を裏付ける。まだ4号機を設置できた2006年には全国で200万3,482台が設置されていたパチスロが、完全5号機時代となった3年後の2009年には134万7,176台に。33%減となった。3年で3分の1が消えた計算だ。

規則改正が実施されたのが2004年7月で、5号機時代は2004年の規則改正から2022年1月の完全撤去まで約18年にわたって続いた。4号機時代の約16年をも上回る、パチスロ史上最長の号機時代となった。長い冬は、やがて長い春へと変わっていく——ただしそれには、時間が必要だった。

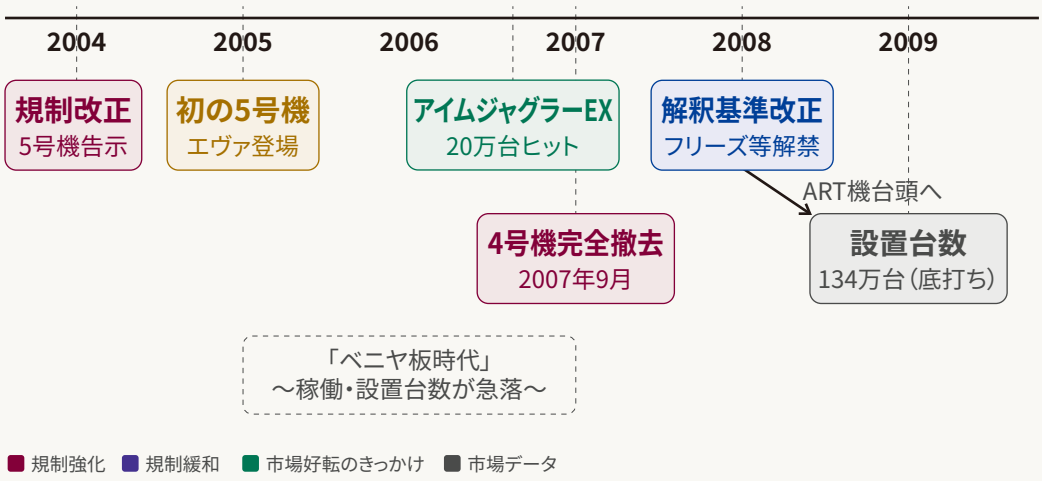
以下に5号機初期の設置台数推移と主要な規制・緩和イベントを年表で示す。

パチスロ設置台数の推移（2006〜2012年・参考値）



出典：業界資料等の複数ソースによる推計値。誤差あり。

5号機時代の主要イベント年表



グラフが示す通り、設置台数は2009年に底を打ち、2010年以降は回復へと転じる。その転換を生んだのが、2008年の解釈基準改正を起点とする押し順ART・フリーズ演出・ボーナス内包AT機の登場だった。「出玉の量」ではなく「体験の質」でプレイヤーを引き戻す——5号機の長い旅は、そこから新たな章を迎える。

冬が教えてくれたこと

Spec Archives

5号機の「冬の時代」は、業界にとって苦い経験だった。しかしその苦さの中に、重要な気づきがある。プレイヤーが求めていたのは「爆裂」そのものではなく、「何かが起きるかもしれない」という体験の密度だったのではないか。

アイムジャグラーがベニヤ時代に20万台を売り、ARTの進化が2010年代の盛り上がりを生み出した事実は、その答えの一端を示している。規制は出玉を削ったが、創意工夫は止まらなかった——それが5号機という長い時代の正体だ。

※本稿に記載の数値等は複数ソースで確認したものですが、集計時期や調査方法により差異が生じる場合があります。参考値としてご覧ください。

［次回予告］第7回 淘汰と残存【メーカー史②】〜倒産、合併、撤退——生き残ったのは誰か〜

冬の時代を生き残ったメーカー、力尽きたメーカー。倒産・合併・撤退の連鎖が業界の地図をどう塗り替えたのか。